

【登場人物】

源氏の君：…御簾から櫛を差し込む

六条御息所：……白い着物

【場面解説】

年下の恋人への愛ゆえに、生霊となつて源氏の君の正妻・葵の上を死に追いやつたゆえに、長らく関係が途絶えていた源氏の君と六条御息所。娘の斎宮（のちの秋好中宮）と伊勢に下向する準備のために、嵯峨野の野宮にこもっていた六条御息所を最後の別れにと訪ねる源氏の君。会おうとしない御息所に対し、源氏の君は御簾の下から櫛を差し入れ、櫛の葉の色に掛けて、変わらぬ心を告げるのでした。

金雲の向こうには、櫛の木と嵯峨の野宮を現す黒木の鳥居が描かれています。

少し怒っているようにも見える表情で描かれているのは、浄土寺本に唯一登場する六条御息所の姿。御簾越しに透けて見える金色の背景に散らされた秋の草花が、月に照らされた源氏の君の美しさをひとときわ際立たせ、秋の別れのシーンを美しく描いています。



【詞書】ことばがき 扇面に書かれている文字

神がきは

しるしの杉もなき物を

いかにまがへて

おれるさかきぞ

（六条御息所から源氏の君への和歌）

【現代語訳】

この神垣には、しるしの杉も立ててありませんのに、どう間違えて櫛を折って訪ねていらつしやうたのでしうか。